吉本隆明全著作集(続)

6

作家論 I

勁草書房

吉本隆明全著作集（続）6
昭和五三年七月三一日第一刷発行

著者　吉本隆明
発行者　井村寿二
発行所　勁草書房
〔東京都文京区後楽二の二三の一五
電話番号　東京八一四局六八六一
郵便番号一一二
振替口座東京五―一七五二五三番〕
印刷所　浩文社
製本所　青木製本
＊定価は外函に表示してあります。
©1978 by Takaaki Yoshimoto

落丁・乱丁本はおとりかえします
無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます
0390-888400-1836

目

次

源　実朝

Ⅰ　実朝的なもの……五
Ⅱ　制度としての実朝……二〇
Ⅲ　頼家という鏡……五一
Ⅳ　祭祀の長者……六九
Ⅴ　実朝の不可解さ……八六
Ⅵ　実朝伝説……一〇三
Ⅶ　実朝における古歌……一四一
Ⅷ　〈古今的〉なもの……一六七
Ⅸ　『古今集』以後……一八九
Ⅹ　〈新古今的〉なもの……二〇六
Ⅺ　〈事実〉の思想……二三五
実朝年譜……二五五
参考文献……二六三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

実朝和歌索引……二六七
実朝論断想……二六九
実朝論補遺……二七八
解題……二九四

作家論Ⅰ

吉本隆明全著作集〔続〕 6

源実朝

I　実朝的なもの

あの戦争のころ、できたらその一言一句もききもらすまいとねがっていた文学者のうち、太宰治と小林秀雄とは、もう最後の戦争にかかったころ、それぞれの仕方で実朝をとりあげた。太宰治は『右大臣実朝』をかき、小林秀雄は、のちに『無常といふ事』のなかに収録された「実朝」論をかいた。太宰の『右大臣実朝』は、ひとくちにいえば太宰の中期における理想の人物像を実朝に托したものといっていい。「駈込み訴へ」にはっきりと描かれているように、太宰の中期の理想像はキリスト・イエスであった。そして実朝にはキリスト・イエスにあたえた人物像をほとんどそのまま再現したといってよかった。聡明で、なにもかも心得ていながら口にださず、おっとりかまえているといった人物像は安定期の太宰のあこがれた理想像であった。こういう人物はかならず現実では敗北するのだが、その敗北はよく心得た敗北であり、もし人間性に底しれない深い淵のようなものがあるとすれば、真にそれを洞察できる人物は、こういう敗北を、あるいは敗北と感じないかもし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れない。そこにいわば太宰治の人間にたいする祈願のようなものがあるといってよかった。実朝がじっさいにそういう人物であったかどうかはべつとして、北条氏執権の陰謀のうえにのりながら、暗殺されるまで耐えて、けっしてぼろをださなかった『吾妻鏡』の実朝から、太宰はそういう実朝像をこしらえあげたのである。もちろん太宰治の実朝像は『吾妻鏡』からうかがえる実朝像を極度に拡大してみせたものであった。だから実朝と北条氏時政あるいは義時とはじっさいは反目などはなく、よく心得え了解しあったものどうしの主従であった、というところまで解釈を拡げてみせなければならなかった。陰険な策謀のできる北条氏にたいして、いささかでも冷たい暗黙の反感をしめす実朝を描くとすれば、おそらく実朝の実像にはちかくなったかもしれないが、太宰治の理想の人間像にはかなわなかったのである。心得てだまされながら悠然としていられる人物、裏切られても悄げかえらないで、平気で滅亡できる人物が、太宰のひそかに願いつづけた自我像であったといってよい。

小林秀雄の描いた実朝像は、陰惨な暗殺集団のうえにのっかった無垢な詩人の孤独といったものに重点がおかれていた。しかしなによりも小林の実朝論がわたしを驚かしたのは、古典を身近に呼びよせてしまうその手腕であったといってよい。かれの実朝像がじっさいに叶っているか、学問的にいってどうかというたぐいのことはあまり問題ではなかった。ただ、かつてどのような批評家も研究者も、これだけ鮮やかに古典のなかの人物を蘇えらせたものはないようにおもわれた。小林の

描いた実朝はべつに小林の理想像ではない。むしろ戦乱のなかで、ある意味で孤独であった小林秀雄自身が、実朝に移入されているとみてよかった。

そのころわたしの傾倒していた数少い文学者のうち二人までが、どうして〈実朝〉をとりあげたのだろうか。これにはべつに共通の理由はないのかもしれない。極端な復古主義的な風潮のなかで、じぶんなりの〈古典〉をしめしたかっただけであったのか。

けれど、読者のほうはいつもわがままである。そこに〈実朝的なもの〉ともいうべきものがひとりでに形成されてくる。〈実朝的なもの〉とは、外観からいえば第一級の詩心の持主であるということであり、また、暗殺によって夭折したものであるということである。そしてもしかすると〈貴種〉であるということであるかもしれない。しかし、その生涯の曲線にこれだけの条件があれば、作家や批評家の関心を惹くであろうか。どうもそれは疑わしいようにおもわれた。太宰や小林の〈実朝〉から、わたしがうけとったものは〈実朝〉でなくてもよいような何かであった気もする。それを〈実朝的なもの〉と名づけておくとすれば、この〈実朝的なもの〉は、暗い詩心ともいうべきものに帰せられる。そしてこの暗い詩心は、そのまま太宰や小林の内面に帰せられるものであった。太宰が「平家ハ、アカルイ」、「アカルサハ、ホロビノ姿デアラウカ。人モ家モ、暗イウチハマダ滅亡セヌ。」と作中の実朝にいわせたものが心に響いたといいかえてもよい。また、小林が〈箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄るみゆ〉を引用して「この所謂万葉調と言はれ

る彼の有名な歌を、僕は大変悲しい歌と読む。実朝研究家達は、この歌が二所詣の途次、詠まれたものと推定してゐる。恐らく推定は正しいであらう。彼が箱根権現に何を祈つて来た帰りなのか。僕には詞書にさへ、彼の孤独が感じられる。悲しい心には、歌は悲しい調べを伝へるのだらうか。」とかいている心が問題であったような気がする。これについては、いくらか解説が必要である。

実朝の在世中は、源平合戦の余燼がまだくすぶり、とくに南海道や西海道では不安な小競合いがつづいていた。また、実朝が将軍職におさまる前後から死ぬまで、地方の家人たちと律令国衙の官人たちとの争いや、社寺の反目、家人たちの領地あらそいは絶えなかった。そしてすぐ足元では、頼朝以来の宿老たちと北条氏との反目と内訌はあとをたたず、つぎつぎに梶原氏、畠山氏、和田氏は北条氏にたいして兵をあげて滅亡させられたのである。この宿老たちの内訌で、梶原氏のばあいをべつにすれば、実朝はいつも北条氏にかつぎあげられて、愛すべき宿将たちを失わねばならなかった。しかし、この全国的な戦乱は、けっして〈暗かった〉わけではない。戦乱も合戦も単純で直截で愚かでというように、人間の心の動きと行動を規制してしまう。むしろ健康で、〈建設的〉で、痴呆でといったものが社会を支配する。これは戦乱をしらないものにいくら強調してもたりないくらいである。かれらはもしかすると、健康で明るく〈建設的〉であることが平和の象徴だと錯覚しているかもしれないから。そう教えこんだものたちが痴呆なのだ。実朝の生涯を世情として規定していたものは、こういう明るい危うさであったといってよい。太宰も小林も戦争期のこういう明る

さと、〈建設の槌音〉との健康さがもつ退廃に、どこかでついてゆくことができなかった。それは文学の宿命のようなものであるといってよい。かれらの描いてみせた実朝像は〈暗いもの〉のもつ内実であったとかんがえてよい。これは、〈明朗アジアの建設〉というようなスローガンのどこかに、かすかな疑念をいだいていたわたしの心に浸みこむだけの力をもっていたのである。明るいもの、健康なもの、建設的なものはすべてまやかしであり、疑いをもったほうがよいというかんがえを、太宰や小林の実朝像からうけとった。かれらにとって、戦争のただなかにある自分という設定と、戦乱と合戦と武将たちの内訌のただなかにのっかった実朝という設定とは、おなじことを意味していたはずである。また、明るさ・単純さ・健康さ・痴呆・殺し合いのうえにのっかった実朝という設定と、建設的・単純・健康・鍛錬・戦争のただなかにおかれた自分という設定とは、おそらくおなじことを意味していたはずであった。わたしには、これが〈実朝的なもの〉の本質としてうけとられたのである。

いまにしておもえば、太宰の『右大臣実朝』にも、小林の「実朝」論にも、べつの問題がなかったわけではない。実朝の作品に、

太上天皇御書下預時歌

おほ君の勅を畏(かしこ)みちゝわくに

心はわくとも人にいはめやも

山はさけ海はあせなむ世なりとも
君にふた心わがあらめやも

ひんがしの国にわがをれば朝日さす
はこやの山の影となりにき

太宰が作中の実朝に「叡慮ハ是非ヲ越エタモノデス」と云わせたところのものはこれらである。また、小林が〈山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも〉を引用して「この歌にも何かしら永らへるのに不適当な無垢の魂の沈痛な調べが聞かれるのだが、彼の天稟が、遂に、それを生んだ、巨大な伝統の美しさに出会ひ、その上に眠った事を信じよう。」とかいたものとおなじであった。当時のわたしに、これらをいささかでも否定するだけの力はなかった。もっと、かれらよりも生々しく危ないところにいたからである。

また、だから逆に敗戦後に〈実朝的なもの〉のうち、この問題はなにを意味するのかは、別個の生きもののように脳裏をさらないできたともいえる。もし、いま、わたしが〈実朝的なもの〉とは

なにかを問いかえすとすれば、ぜひともこの理由をさけてとおることはできない。それはじぶんがじぶんにそれをゆるすことができないからである。実朝はなぜこういう歌を詠まねばならなかったか。また、そのことにはどんな人間的な、また制度的な必然があったか。この問題は、詩人実朝をとりあげるのとおなじように、わたしには不可避である。わたしの〈実朝的なもの〉は当然これを包括しなければならない。

人間は病気で死ぬこともできるし、じぶんでじぶんを殺すこともできる。また他人から殺されることもできる。ただ、他人から殺されるばあいには、その〈死〉はどこかで他人の〈死〉と交換される条件がなければならない。つまりかれが〈死〉ななければ、ほかのたれかが〈死〉ぬとか、かれが〈生きている〉ことは、他人が〈生きていること〉と相容れないとか、いうことが、公的にか私的にかどこかでかんがえられていなければならない。もちろん偶然の〈事故〉で殺されるということはありうるが、そのばあいにも偶然性のなかにその〈死〉が他人の〈死〉と交換される条件がなければならない。だから、もしもかれが殺されなかったとしたら、という仮定は言葉の戯れとしてしかなりたたないのである。

実朝の生涯は単純きわまるものであった。その生活はほとんど鎌倉大倉郷の幕府営中でおくられた。伊豆・箱根権現への参詣をのぞいては、鎌倉在をはなれることはなかったのである。あれほど武家勢力の統領として、分を守ろうとした頼朝でさえ、二度は京都にでかけている。実朝は京風に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com